

ゲーテにおける枠物語：メールヒェン・ノヴェレ・ロマーン

木田, 綾子

<http://hdl.handle.net/2324/1500464>

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学）, 課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏名 木田 綾子

論文内容の要旨

本論は、ゲーテが『ドイツ避難民の談話』(1795)と『親和力』(1809)と晩年の大作『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(1829)において枠物語という古典的な文学形式を巧みに用いながら、「メールヒェン」「ノヴェレ」「ロマーン」といった新たな文学ジャンルを展開させることで、物語という人間の根源的営為の核心に迫って行った経緯を明らかにした。

枠物語は古くから西洋文学において好んで用いられてきた古典的な文学形式である。代表的な作品として、ボッカチオの『デカメロン』(1348-1353)、チョーサーの『カンタベリー物語』(1387-1400)、バジレの『ペンタメローネ』(1634-36)などが挙げられよう。一般的な理解では、枠物語をドイツでいち早く取り入れたのはヴィーラントの『妄想に対する自然の勝利すなわちドン・シルヴィオの冒険』(1764)であるが、この古典的な文学形式をドイツに広めたのは、複数の人物によって語られる七つの挿話を含むゲーテの『ドイツ避難民の談話』(1795)である。もっとも、ゲーテのいずれのロマーンも何らかの形で挿話を含んでいるにもかかわらず、『ドイツ避難民の談話』以外の作品は枠物語という観点から考察されることは皆無に等しかった。しかしながら、伝統的な枠物語によく見られる設定、すなわち、夜も更けるころ気晴らしや癒しのために物語が語られるという設定は、ゲーテの他のロマーンにも認められるのである。ゲーテは古典的な枠物語の形式を巧みに利用しながら、当時はまだ発展途上にあった文学ジャンルを新たに展開させたのであり、別言すると、18世紀より台頭してきたロマーンという新しい文学形式に「物語の中の物語」であるメールヒェンやノヴェレを組み込むことによって、新たな表現可能性を探ろうとしたのであった。

『ドイツ避難民の談話』と『親和力』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』は、枠物語という観点からすると、非常に関連性が高い。『遍歴時代』は『談話』と『修業時代』の続編の構想が合わさって完成した作品であるし、『親和力』はもともと『遍歴時代』の挿話の一つとして構想されていたからである。事実、『ドイツ避難民の談話』中の「メールヒェン」、『親和力』中の「隣り同士の不可思議な子どもたち——ノヴェレ」、『遍歴時代』中の「新メルジューネ」は、いずれにもタイトルが付されている点と、挿話として独立性が高いにもかかわらず、作品全体と挿話とが密接な関係にある点において共通している。また、いずれの作品においても、挿話の語り手が聞き手に

とって馴染みのない存在に設定されている点も看過できない。

本論は、ゲーテにおける枠物語形式の三段階を明らかにするため、まずは第一章にて、伝統的な形式が色濃く残る『ドイツ避難民の談話』を分析し、この作品をゲーテが枠物語形式を用いた第一段階として示す。次に第二章では、ロマーンという副題の付いた『親和力』を分析し、作品全体とこれに収められた「ノヴェレ」との対照性に第二段階の特徴を見出す。最後に第三章では、『遍歴時代』を分析し、その挿話の一つである「新メルジーネ」が、いわゆる第三段階として、「メールヒェン」、「隣り同士の不可思議な子どもたち——ノヴェレ」の一連の流れの延長線上にあることの意味を三つの節に分けて論述する。その際、本論独自の見解としてこれら三挿話の連関を指摘し、併せて『遍歴時代』において度々登場する小箱のモチーフにも着目し、その空間性と作品構造の類似性について分析を行う。ゲーテのロマーンにおいては、登場人物の一人である語り手によって設けられた一つの枠が、それが単なる枠組みにとどまらず、作品全体に大きな力を及ぼすのである。Exkurs では、編者の存在によって一つの枠構造をなす『若きヴェルターの悩み』(1774)を扱う。この書簡体小説は必ずしも古典的な枠物語形式を踏襲していないが、情感あふれる主人公の内面吐露を大きな枠で括ることで、枠の内と外に「不思議な親和」をもたらす。独自の枠構造をもつ書簡体小説とともに、ゲーテ文学、とりわけ散文作品は始まったのである。なお、最後に論文全体のドイツ語要約を *Zusammenfassung* として付す。

詰まる所、枠物語形式の文学は、人間が古来より営んできた物語る行為と伝承をめぐる状況そのものを作品内に取り込む。ゲーテはそうした営為における歓待やもてなし、気晴らしや癒しを描きながら、文学的営為の、いや人間存在の根源的な有り様を示す。その意味でゲーテは枠物語という古典的な文学形式をただ単に踏襲したのではない。固定的な枠組みがあるからこそ、逆に固定化されない動的な内と外との照応関係を巧みに用いながら、「人間の自然」をめぐる内と外のダイナミズムをまさに伝承するのである。このとき、古典的な文学形式が新たに甦るとともに、「物語の中の物語」が独自の生を獲得する点も見逃せない。逆に言えば、メールヒェンが単なる小話ではなくなり、ノヴェレが単なる新奇な短い話ではなくなり、「新メルジーネ」が伝承の単なる再現ではなくなることによって、それらを取り込んだロマーン全体が動的な独自性を獲得するのである。